The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文末表現スロット仮説 ： 終助詞の統語的な位置をどう捉えるのか
Author(s)	ヴルボウスキー, マテイ
Citation	間谷論集. 2022, 16, p. 105-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

文末表現スロット仮説
――終助詞の統語的な位置をどう捉えるのか――

ヴルボウスキー　マテイ

〈キーワード〉 終助詞　文末表現　統語論　語用論

０．はじめに

終助詞の意味研究において有力な検証法として、終助詞の置き換えがある。

(1) a. さあ、行こう｛ぜ／＊ぞ｝
　　b. 俺が行こう｛＊ぜ／＊ぞ｝！[1]

しかし、(1) を意味的な問題として扱っても妥当であろうか。(1) は、統語的な要因で決定されると仮定すれば、言語現象が混同されてしまい、適当な方法及び妥当な分析を徹底しても、誤った結果に導かれる可能性がある。そこで本稿は、(1) のような現象を検討することで、終助詞の意味的な研究のために統語的な基盤を提案することを課題とする。

１．先行研究

終助詞の意味に関する研究に比較すると、終助詞の統語的な位置に関する研究の蓄積は比較的少ない。そこで、先行研究を取り上げる際はとりわけ、終助詞の分類、終助詞の相互承接、そして文タイプと終助詞との共起制限に着目する。

１－１．渡辺（1968）

渡辺（1968）の終助詞分類を簡略し、(2) のようにまとめる。

(2) 第１類：{か、さ、わ、ぞ（ぜ）}、第２類｛よ（い）}、第３類：{ね（な）}

判断との繋がりという連続性のある基準に基づいた分類が提示されている。例えば、第１類のカは、話し手は「自ら判断の責任を問わず、むしろ相手の判断に依存する」（渡辺 1968：130）とされ、サは、「判断の放棄を意味」し、「判断の責任を追う必要がないこと、判断を下すまでもないこと」（渡辺 1968：131）を伝達する。右側に進めば、「判断とのつながりが、一段と弱まって消失する」（渡辺 1968：132）とされるヨがある。同じ種類のものが共起できず、相互承接及び順序は種類の順番の通りである。文タイプと終助詞との共起に関する説明はされていない。

１－２．遠藤（2014）

遠藤（2014）は、Cinque（1999）の「普遍的なムードの階層」に基づき、４つの統語的な位置を仮定し、それらに合わせて終助詞を（3）のように分けている。

(3) 来た$_{\text{時制}}$］ワ$_{\text{認識のムード階層}}$］ナ$_{\text{証拠性のムード階層}}$］ヨ$_{\text{評価のムード階層}}$］ネ$_{\text{発話行為のムード階層}}$］

遠藤（2014）は、互いに共起できない形式は、相補分布の関係を成しているとし、同じ階層を占めるとしている。例えば、終助詞ワはダロウと共起できないため、ワはダロウとは同じ「認識のムード階層」を占める形式であると議論されている。なお、遠藤（2014）では文タイプと終助詞との関係に詳しく触れていない。

２．本稿の前提

本稿は、(4) から（6）の３つの前提を仮定して、議論を進める。

(4) 同じ性質の形式は共起しない（相入れない関係にある）
(5) 終助詞の順序はその統語的な位置によって決定される
(6) 終助詞の統語的な位置は、文タイプと関係している

(4) と (5) に加え、新しく (6) を導入する。その根拠は次の通りである。(7) からわかるように、文タイプによって終助詞の出現が異なる。本稿は、その関係性の明確化を課題としないが、その関係性があることを仮定する。

(7) a. 行く｛よ／ね／さ｝。
b. 行かないで｛よ／ね／＊さ｝。
c. 行け｛よ／＊ね／＊さ｝。
d. 私が行こう｛＊よ／＊ね／＊さ｝。

３．モダリティ形式の統語的な位置

まず、日本語におけるモダリティ形式の全体図を概観する。日本語記述文法研究会（2003）は、モダリティ形式を、A.「表現類型のモダリティ」B.「評価のモダリティ」C.「認識のモダリティ」D.「説明のモダリティ」E.「伝達のモダリティ」に分類している。(8) のように表現してみると、相補分布及び相互承接を意識した分類であるとわかる。

(8) ［［食べてもいい$_{B}$］［かもしれない$_{C}$］［んだ$_{D}$］［よ E］$_{A}$］

終助詞の統語的な位置は、時制、それから評価、認識、説明のモダリティの外側にあると確認できる。ただし、この条件に当てはまる形式はもう１つある。

(9) a.　彼は学生だっただろう。
b. ＊彼は学生だろうだった。
(10) a.　このラーメンは、食べてもいいだろう。
b. ＊このラーメンは、食べるだろうてもいい。

(11) a.　このラーメン、彼が食べたかもしれないだろう。
　　b. *このラーメン、彼が食べただろうかもしれない。
(12) a.　これはこのようにやるんだろう。
　　b. *ここれはこのようにやるだろうんだ。

推量や確認を表す助動詞のダロウは、認識のモダリティ形式と捉えられがちであるが、(11) からわかるように、認識のモダリティ形式と相補分布を成していないため、異なる統語的なカテゴリーであると示唆される。なお、ダロウは活用できない点においても、他の助動詞とは異なり、終助詞に近い性質を見せている。

(13) a.　彼は、ラーメンを食べたかもしれなかった。
　　b. *彼は、ラーメンを食べた｛だろう／よ｝｛かった／だった｝。

遠藤（2014）は、前提としてダロウを認識のモダリティ形式とし、終助詞ワに関して、ダロウと共起できないため、ダロウと同じ「認識のムード階層」としているが、ダロウの特殊性からすると、異なる説明が見えてくる。すなわち、ダロウは、認識のモダリティ形式との意味的類似性にも関わらず、形式として終助詞化し、終助詞と同じ統語的な位置を占めていると考えられる。

４．文末表現スロットⅠ

ダロウは、終助詞と同じ統語的なカテゴリーであると仮定すると、幾つかの現象の説明が明確になってくる。まず、ダロウは、ワとゾと共起できないことから、それぞれの形式がお互い相補分布の関係にあり、同じ統語的なカテゴリーであることを示唆している。以後、この統語的なカテゴリーのことを「文末表現スロット」（Sentence-Final Expression Slot）と呼び、SFES と表す。

(14) 彼はラーメンを食べた｛だろう／わ｝｛よ／ね｝。

次に（14）は、ダロウ／ワと、ヨ／ネとが共起可能であり、相補分布の関係を成していないため、ヨ／ネが位置する文末表現スロットは、ダロウ／ワが占める位置とはまた異なる SFES であること、そしてそれぞれの形式の順序は、｛ダロウ／ワ｝→｛ヨ／ネ｝であること、という 2 つの事実を示唆している。以後、命題により近い位置を文末表現スロットⅠ（SFES Ⅰ）と呼び、命題より遠い位置を文末表現スロットⅡ（SFES Ⅱ）と呼ぶ。

続いて、SFES Ⅰの形式の共起制限を文タイプからみると、次のような規則性が観察される。（15）～（17）からわかるように、文タイプとの共起制限において、SFES Ⅰに所属する形式は似た振る舞いを示している。この規則性は、それぞれの文タイプと、それぞれの形式の意味的な不整合性であると仮定するより、それぞれの文タイプが SFES Ⅰを備えているか否かという統一的な説明が妥当であろう。

（15）彼はラーメンを食べる｛ぞ／わ／だろう｝。
（16）私はラーメンを食べる｛ぞ／わ／＊だろう｝。
（17）君もラーメンを食べよう｛＊ぞ／＊わ／＊だろう｝。

５．文末表現スロットⅡ

ダロウを SFES Ⅰの形式と仮定すれば、その共起制限が手がかりになる。

（18）彼も行くだろう｛よ／ね／ぜ｝。

ゼは、ゾから派生されたと主張する研究も多く、ゾと似た機能を持っている[2]。しかし、ゼがダロウと相補分布の関係を成していないこと、ゼヨやゼネのような形式が共通語において観察されないことは、ゼが SFES Ⅱの形式であることを示唆している。本稿の分析が正しければ、ゾとゼは、機能上の類似性に関わらず、異なる統語的なカテゴリーであると結論づけられる。

次に、文タイプとの共起制限を概観すると、SFES Ⅱは、SFES Ⅰの配置が確認できる（19）の平叙文と（20）の意志文にもあることがわかる。しかし、（21）

からわかるように、ダロウ／ゾ／ワが共起不可能な勧誘文には、ヨ／ネ／ゼなら出現することができる。そのことから、勧誘文は文末表現スロットⅡを備えているということが示される。

（19）こいつはラーメンを食べる｛よ／ね／ぜ｝。
（20）俺はラーメンにする｛よ／ね／ぜ｝。
（21）君もラーメンを食べよう｛よ／ね／ぜ｝。

続いて、ゾとゼの意味機能を取り上げている深尾（2010）は、ゼが疑問詞疑問文と共起することができるとし、（22）のような例を挙げている。深尾（2010）は、その解釈や成立条件の説明を与えていないが、筆者の分析結果から言えば、疑問詞を含むゼ文は、反語に似た機能を持ち、相手の行動を理由に、話し手が不満や非難を表出したい場合に用いられる形式である。よって、（22）は、《俳優 S なんて知らないし、知ることにも値しない》と解釈できる[3]。このように、ヨ／ゼが疑問詞疑問文のうち、反語に似た機能を持つものに出現できるという事実は、その形式にそれらの統語的な位置が備わっていることを示していると考えられる。

（22）俳優 S って一体誰だ｛ぜ／＊ぞ｝？（深尾 2010：132）

６．議論

上記の分析から判明したことを総じて「文末表現スロット仮説」（SFES 仮説）と呼ぶ。なお、仮説通りであると仮定すると、幾つかの問題が浮き彫りになる。紙幅の都合上、その中の幾つかに対して説明を検討する。

６－１．ゾナに関して

まず、SFES 仮説は、言語事実と一致する形式（ワヨやダロウネ）を予測していると同時に、ゾと SFES Ⅱの形式との組み合わせまでも予測してしまうという問題がある。そこで、（23）に注目したい。

（23）４つの噴水を復活させる気ぞな！（オ）[4]

（23）は、容認性が極めて低いが、役割語として捉えれば適格な文であり、本稿の議論にとって重要な事実を示している。それは、条件が揃えば、ゾと SFES Ⅱの形式が同じ文において共起することがあり、その順番も、終助詞ゾが先に位置し、SFES Ⅱの形式がゾに後続するということである。

ここで、なぜゾナのような形式は役割語でなければ容認されないかという問題が出てくる。ゾは、発話解釈に貢献するという文法的な意味と同時に、登場人物に性格や属性等を帰するための役割語的な意味（金水、2003）を持ち合わせている。（23）は、役割語的な意味が優先される一方、文法的な意味が薄まるため、通常ならばありえないゾナが容認される、という説明が考えられる。よって、ゾナは、理論的に可能であるが、本来なら意味的不整合性を理由に容認されない形式であると考えられる。

６－２．ヨネに関して

次に、ヨとネは、同じ統語的なカテゴリーであると仮定すれば、相入れない関係にあり、その複合形とされるヨネの説明が困難になってしまう。渡辺（1968）及び遠藤（2014）が、ヨとネを、先行するヨと後続するネという分類をしていることも、ヨネが複合形であるという認識があるからであると考えられる。

しかし、ヨネを分析的に扱う必要が妥当であろうか。近年に至る終助詞の意味研究では、ヨネの意味は、ヨとネとの単独形の意味をそのまま適用するだけでは説明しきれないという指摘がされている[5]。意味的研究の見解に基づけば、ヨネは、分析的に捉えるより、語彙化した形式として捉えた方が妥当と考えられる。なお、ワヨネの順序から考えると、ヨネは SFES Ⅱの形式になる。そのように仮定すれば、ヨとネは同じ統語的なカテゴリーであっても、ヨネの説明が付く。

６－３．文タイプに関して

最後に、文タイプと個別の形式の共起制限に触れる。

表２　文タイプにおける終助詞の共起制限

文タイプ	例	ダロウ	ゾ	ネ	ヨ
平叙文	彼が行った	○	○	○	○
意志文（スル）	僕が行く	×	○	○	○
勧誘文	君も行こう	×	×	○	○
依頼文	君も行って	×	×	○	○
命令文	行け	×	×	×	○
禁止文	行くな	×	×	×	○
意志文（シヨウ）	僕が行こう	×	×	×	×

意志文（スル）とダロウの場合、それから命令文及び禁止文とネの場合からわかるように、必要な統語的な位置が備わっても、当該の形式が出現しないことがある。その理由に関しては次のように考えられる。意志文は、話し手自身による未来の行為の実行についての内容を表している形式である。よって、伝統的に強い主張と結びつけられているゾ（国立国語研究所、1951：63-64、など）を付加しても、意味的な不整合性が生じない。しかし、推量を表す形式とされるダロウの場合は、「推量の対象になるのは、話し手にとって本来知りえないことであるので、［省略］話し手自身の行動予定に「だろう」を用いることが自然ではない」（日本語記述文法研究会、2003：148）と、意味的な矛盾に基づいた説明が可能である。

命令文及び禁止文には、ヨ以外の形式が付かない。このことは、命令文と禁止文には SFES Ⅱがあるのに対して、SFES Ⅰがないこと、それから SFES Ⅱの形式の中でもヨしか位置できないことを示している。

命令及び禁止と、ヨ／ネとの関係に関しては中田（2009）が詳しい。ヨとネを発話行為論から分析している中田（2009）は、「終助詞ヨは発話行為の事前条件を焦点化し、終助詞ネは発話行為の誠実性条件を焦点化する」（中田、2009：19）とし、禁止とネに関しては、「権威的に禁止を行う行為と共にその心理状態を表出しては権威が保てなくなる。よってネ文が不適格となる」（中田、2009：19）と述べている。それに対してヨは、禁止の事前条件を焦点化することで、上昇調のヨを用いることでおもんぱかった禁止、下降調のヨを用いることで注意を喚起

する禁止と、それぞれ異なるニュアンスを区別するために用いられる。また命令文に関しても同じ説明を与えている。すなわち、この場合も意味的な要因が働くと考えられる。

最後に、意志文（シヨウ）に注目したい。幅広い形式の共起が観察される意志文（スル）に比べると、意志文（シヨウ）は文末表現スロットⅠの形式でも、文末表現スロットⅡの形式でも、それらの形式との共起を許さない。このことは、意志文（シヨウ）には、そもそも文末表現のための統語的な位置が配置されていないということを示唆している。

7．むすび

文末表現スロット仮説を（24）と（25）のようにまとめる。

(24) a.　文末表現スロットⅠ：{ダロウ／ゾ／ワ}
　　b.　文末表現スロットⅡ：{ヨ／ネ／ヨネ／ゼ}
(25) a.　【平叙文】【意志文（スル）】：［スロットⅠ］［スロットⅡ］
　　b.　【勧誘文】【疑問詞疑問文】：~~［スロットⅠ］~~［スロットⅡ］
　　c.　【意志文（シヨウ）】：~~［スロットⅠ］［スロットⅡ］~~

文末表現スロットを念頭に置くと、言語現象を次のように整理できる。(26) は、文タイプに必要な文末表現スロットの有無によって決まる問題であるため、統語論的な現象であると結論づけられる。他方、(27) は、必要な統語的な位置がありつつ、文末表現が異なる振る舞いを見せる言語現象であるため、意味的な問題として捉えられる。文末表現スロット仮説を基盤として用いた、文末表現の新たな意味研究の成果が期待される。

(26) a.　さあ、行こう｛ぜ／＊ぞ｝（(1a) の再掲）
　　b.　俺が行こう｛＊ぜ／＊ぞ｝！（(1b) の再掲）
(27) a.　あんた、さっさとラーメンを食べろ｛よ／＊ね｝
　　b.　そろそろ行く｛わ／＊ぞ｝よ。

注

1　用例出典は、明示しない限り、筆者作例である
2　その議論に関しては中崎（2008）が詳しい
3　ただし、ぜよりも、ヨの方が容認される：「俳優 S って一体誰だ｛よ／?? ぜ｝」
4　方言からの干渉を防ぐため、土佐弁と考えられるゾヨやゾネを用いないこととする
　「そうだろうな」や「君も食べような」からわかるように、ナも SFES Ⅱの形式である
5　ヨネの用法及びその議論に関して詳しくは中田（2016）を参照

参考文献

遠藤喜雄（2014）『日本語カートグラフィー序説』ひつじ書房
金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店
国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版
中崎崇（2008）『現代日本語終助詞の研究』(未公開博士論文、大阪大学)
中田一志（2009）「発話行為から見た終助詞ヨとネ」『日本語文法』第 9 号 pp.19-35
中田一志（2016）「話し手と聞き手の関わりから見た終助詞「よね」」『日本語・日本文化研究』第 26 号 pp.1-15
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法４：第８部　モダリティ』くろしお出版
深尾まどか（2010）「終助詞「ぜ」「ぞ」の意味機能」『台灣應用日語研究』第 7 号 pp.125-142
渡辺実（1968）「終助詞の文法論的位置―叙述と陳述再説」『国語学』第 72 号 pp.127-135
Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford: Oxford University Press

用例出典

「オ」：任天堂ゲームソフト『スーパーマリオオデッセイ』2017 年 10 月 27 日発売

ヴルボウスキー　マテイ
（大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程 /
大阪大学日本語日本文化教育センター特任研究員）

Sentence-Final Expression Slot Hypothesis
On the Syntactic Position of Sentence-Final Particles

VRBOVSKY Matej

Although is the practice of replacing Sentence-Final Particles (SFP) a staple of (but not limited to) both semantic and pragmatic fields of research, rarely has been discussed the validity of such test in dealing with sentence types other than the declarative sentence. However, the assumption that all co-occurrence related linguistic phenomena associated with SFP and sentence types are semantic and/or pragmatic in nature, especially without any prior analysis, could lead astray an otherwise methodologically sound investigation right from the beginning.

This paper aims to provide a syntactic foundation for a future semantic and/or pragmatic research of SFP. To do so, this paper firstly reviews the existing literature on, and then proceeds to the investigation of co-occurrence, the mutual relative position, and the syntactic position of SFPs. By establishing complementary distribution between several Sentence-Final Expressions (SFE) and observing a regularity in co-occurrence of the aforementioned, this paper concludes as following.

Modern Japanese language has two syntactic positions (Sentence-Final Expression Slots, SFES) reserved for SFPs and expressions undergone “SFPification”, such as the modal auxiliary *darō*. The one closer to proposition, coined in this paper as Sentence-Final Expression Slot I (SFES I), is reserved for SFE such *wa*, *zo* and *darō*, while the one further from proposition, named Sentence-Final Expression Slot Ⅱ (SFES Ⅱ), is occupied by *ne, yo, yone, na* and *ze*. The distribution of both slots (and thus the co-occurrence of SFEs) is hypothesized to be restricted by sentence types. For example, declarative sentences provide both slots, while invitational sentences are equipped only with SFES I. Finally, volitional sentences ending with *siyō* do not accommodate any SFES.